

「永遠の今」における行為の位相
——絶対無の自覚への接触点として——

Position of Act in the “Eternal Now”

—As a point of contact with the “Self-Awareness of Absolute Nothingness”—

落合開智（立正大学大学院）

Kaichi OCHIAI

本発表は、西田哲学中期において、「永遠の今」が「絶対無の自覚」の内実として位置する上で、「行為」概念が両者の接触点としての意義を持つことを西田のテキスト間での「行為」概念の変遷を踏まえた上で明らかにすることを目的としている。

「叡智的世界」論文における自覚の論理は、一般者とその「於いてあるもの」の矛盾的關係を契機に、この矛盾がより本質的な一般者に包摂されることによって自覚が深められた。それゆえ、この包摂の先にある極限概念の「迷える自己」は、絶対無の場所に「於いてあるもの」として、それ以上包摂され得ない無限の自己否定性と捉えられ、積極的に自己を限定し得なかった。そのため、「一般者の自己限定」の根柢に自己の積極的限定が残されるには、行為と表現の關係によって両者が再整理される「総説」論文を待つこととなった。（この点については、別論考で詳しく論じた。）

そこで先ず「総説」論文において「絶対無の自覚」のノエシス的方向である「内的生命」が、「絶対無の自覚」のノエマ的方向である「広義に於ける行為的一般者」における行為と表現との矛盾的關係を包摂するものとして、自覚の形式性によって我々に積極的限定を持ったものとして開かれることに着目する。

「内的生命」は西田によって「無限なる生命の流」とも呼ばれ、それ自体が内容としては限定され得ない自覚におけるノエシス的方向が含む無限の自己限定性として考えられている。これに対し、「総説」より二年後に執筆された「永遠の今の自己限定」論文では、「内的生命」に対応する位置に「永遠の今」が据えられており、ノエシスによる無限の自己限定性以上の定義を持ったものとして「永遠の今」は配されている。

以上を踏まえて、本発表では無限の自己限定性である「内的生命」と、時間的意義を含んだ「永遠の今」との対応關係を、自己ないしは有の側から両概念への架橋を担う「行為」概念の変化を辿ることによって明らかにした上で、「永遠の今」と「絶対無の自覚」の接触点として、「永遠の今の自己限定」論文における「行為」概念の立ち位置を考察する。